

まないた山

福島県大笹生学園

福島市大笹生字俎板山 182-1

☎(024)557-6014

☎・FAX 558-6887

学園創立六十五周年に寄せて

福島県子ども未来局長 須藤 浩光



大笹生学園は、今年で創立から六十五年、そして学園歌及び学園旗の誕生から五十年の節目を迎えました。

大笹生学園は、昭和二十六年十月に県内初の知的障がい児の入所施設として開所して

以来、入所児童の心身の発達を促し、自立に向けた支援の充実を努めてまいりました。

その間、何度かの増・改築が行われましたが、施設の老朽化が顕著となったことから園舎を全面改築し、平成二十六年十二月から新しい園舎で児童への処遇を行っております。

園舎は、自然の光を十分に取り入れ、木材をふんだんに

使用するなど、明るく温かみを感じさせる造りで、個室を

基本に障がいの特性に応じて十人規模のユニットケアを導入するなど、家庭的な環境の中で児童は生活しています。

また、空床を利用した日中一時支援サービスの受入児童数は、建物完成前の平成二十五年が一人であったの

に對し、二十六年は三六四人、二十七年は一〇一人と、増加するニーズに積極的に対応するなど在宅の障がい児を養育する御家族の支援にも力を入れているところで

す。

県といたしましては、「福島県子ども・子育て支援事業

支援計画」などにおいて、障がい児施策の充実を進めるに当たり、入所施設については、専門的な療育機関としての機能強化及び短期入所や保護者への支援等身近な地域での支援体制の整備を進めていくこととしており、今後大笹生学園が果たしていく役割は、極めて重要であるところで

す。

終わりに、これまで大笹生学園の六十五年の歩みを支えていただきました保護者の方々をはじめ地域や関係者の皆様に感謝とお礼を申し上げますとともに、今後とも大笹生学園が児童と保護者に厚い信頼を寄せられる地域に開か

れた施設として、専門的なケアの充実を図りながら様々なニーズに細やかに対応していただけるよう努めてまいりますので、皆様の変わらぬ御支援、御協力をお願い申し上げます。

す。

信頼を寄せられる地域に開か

記念誌「まないた山」の発刊にあたって

東日本大震災の発生により創立六十周年に当たる平成二十三年に「記念誌六十年のあゆみ」を発刊できなかつたため、学園歌・旗の誕生五十周年及び学園創立六十五周年の節目に当たる本年十月に記念誌「まないた山」を発刊し、大笹生学園を広く県民にPRしていきます。

れた施設として、専門的なケアの充実を図りながら様々なニーズに細やかに対応していただけるよう努めてまいりますので、皆様の変わらぬ御支援、御協力をお願い申し上げます。

「大笹生学園のうた」半世紀を迎える

大笹生学園長 土屋広治



この四月、改めて学園の歩んできた道を知りたいと思い、「大笹生学園創立五十周年記念誌」を手にした。『昭和四十一年には創立十五周年を迎え、これを機会に「園旗」

「園歌―大笹生学園のうた」が誕生、現在も引き継がれ歌い継がれている。』という学園概要の二行が目飛び込んできた。

カレンダーに目をやると、「2016」「平成二十八年」の隣に「昭和九十一年」と書いてある。「今年は、学園の旗と歌が誕生して五十周年、更に学園の創立六十五周年だ。」そう思いながら楽譜を見ると、作詞・高橋新一、作曲・伊東英直、贈・毎日新聞福島支局とあった。

早速、毎日新聞福島支局に電話し、2002年4月8日の新聞記事を送っていただ

た。学園歌が生まれた一端が分かり、原点の1963年元日付け毎日新聞福島版を県立図書館で探し出した。そこか

ら「『まないた山』記念誌発行」と「大笹生学園のうた」CD制作・発表会」の二つの企画が動き始めた。

交代勤務で24時間の児童支援に当たる中、職員がプロジェクトチームを立ち上げた。50年の歳月の流れは如何

ともし難い。作詞者の高橋新一さんは亡くなり、長男の重義さんにお父さんの思いを寄せていただいた。辺地の子らに校歌を贈る運動を始めた毎日新聞福島支局の吹山支局長も他界し、坂巻現支局長に寄稿をお願いした。しかし、作曲者の伊東英直さんが御健在で、思いもよらず私の家の近くに住まわれていた。半世紀を経て、学園の子ども達と

の絆は堅く結び残っている思いを強くした。

伴奏だけを録音したカセットテープがあった。入園式、卒園式、園遊会…。子ども達が歌いつなぎ、学園の歴史を支えてきた。50年を機に学園歌をCD録音しよう。職員の身近に合唱団のメンバーがい

た。県北地域で活躍する女声コーラスグループ「T.S. アンサンブル」との出会いがあった。普段の活動に加え、学園歌の練習を重ねCDに録音していただいた。代表の本多真理子さん、指揮者・編曲者の佐藤理夫さん、ピアノ伴奏した職員の阿曾紫麻さん。

多くの方に支えられ、「大笹生学園のうた」誕生五十周年を記念するCD制作と発表会、そして、大笹生学園創立六十五周年記念誌「まないた山」発行の二大企画が完了し

た。関係の皆様にご心から感謝を申し上げ、園児、保護者、職員が一つの心で「大笹生学園のうた」を未来に歌い継いで行きます。



学園歌及び学園旗誕生五十周年を祝う

親の会会長 八巻 惣一



大笹生学園創立六十五周年、また、学園歌及び学園旗の誕生から五十周年の節目を迎えられましたこと、誠にありがとうございます。

大笹生学園は、昭和二十六年十月に開設されました。

奇しくも私の誕生日であり、不思議な縁を感じるところです。

私の子どもは、生後九ヶ月で心臓の手術をして、その後喋ることができず、家庭での養育が難しくなったので、小学生から大笹生学園にお世話になり、十一年目となりました。

お世話になった当初は、月曜日に学園に送っていくと泣かれ、迎えにいくと喜んでいました。近頃では、学園生活も楽しいらしく、学園に送っていく時も泣くことはなくなりました。

学園生活で色々なことを学んだせいか、家に帰ると、あの程度自分のことは自分でできるようになり、日に日に成長していると感じられるようになりました。

お陰様で、自宅に戻る準備もでき、また、実習先でも特にトラブルをおこすことなく、楽しく実習できたようで親として一安心です。

うまく喋ることはできませんが、これからの人生も楽しく送ってくれるのではないかと、思うところです。

これも一重に、私の子どもの行動や特性を考えながら、様々な支援をしてくださった大笹生学園及び職員のお陰で、あり感謝いたします。

私のように、家庭で知的障がいを持つ子どもを養育することが難しい方は沢山いると思います。

これからも、子どもの輝かしい未来に向けて、支援していただけるようお願いいたします。最後に、学園のシンボルとしてこれからも子ども達とともに学園歌を歌い継ぎ、学園旗が引き継がれていくことを期待して、ごあいさつといたします。



「大笹生学園のうた」誕生 50 周年記念



大笹生学園のうた
贈 毎日新聞福島支局
作詞 高橋 新二
作曲 伊東 英直
編曲 佐藤 理夫
合唱 T.S.アンサンブル
伴奏 阿曾 紫麻
録音 2016 年 9 月 3 日

1. 斉唱 2. 二部合唱 3. ピアノ伴奏

福島県大笹生学園



大笹生学園のうた

♩ = 102
明るく 軽やかに Sostenuato

作詞 高橋 新二
作曲 伊東 英直
贈 毎日新聞福島支局

1 おお ひるまに なこにも おおはうさん
2 おと りうさん なか しーも ながかき しゃん
3 と う さ ー さ こん なご ん さん

チャ イン ム コ ロ ロ う た て て る
と ン ィ ビ ミ イ ヒ ヨ ロ よ あ っ が と ろ
と ン ィ ン ン ン な ー さん ー あ っ が と ろ

力強く
さあま ーす いか っし に おお べん きよ
やま のま する かヒ わら しに すら おみ にど わり か

1) お ぎ そ が く え ん う れ し い な
2) 3) }

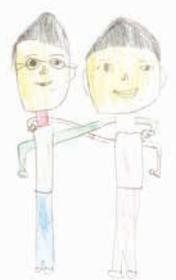


とうさん かあさん
(3) ご気分さん
せんせい みなさん ありがとう
日の丸 ヒラヒラ みどりかぜ
大笹生 がくえん
うれしい ナー

おりんご なし もも
(2) なか良さん
とんび ビイヒヨロ よつてくる
やまです かわです おにわです
大笹生 がくえん
うれしい ナー

お日さま ニコニコ
(1) お早うさん
チャイム コロン うたってる
さあさー いっしょに おべんきよう
大笹生 がくえん
うれしい ナー

大笹生学園のうた



「うれしいナ」の歌詞に
寄せて



高橋 重義

学園創立六十五周年おめでとう
ございます。さらに学園
歌・旗の制定五十周年まこと
おめでとうございます。

毎日新聞福島支局の企画で、
校歌のない辺地の学校に校歌
を贈る運動がスタートをきつ
てから、四十七校目の校歌と
して父新二が作詞にあたった
のが県立大笹生学園でした。

父新二は、作詞にあたって
の心構えとして、「子供たち
の心に寄り添い、子供たちが
口ずさめるやさしい」校歌作
りをモットーとしてどの校歌
においてもやさしい言葉で作
詞にあたりました。いつの場
合も学校の置かれた自然環境
を事前に調査して詞に取り入
れました。

学園を取材して帰った父が、
なかば興奮して、「いい学校
に行ってきたよ。いままでや
さしい校歌を心がけて作って

きたが、大笹生学園はいつそ
うやさしい歌にするよ。」と
言った言葉が忘れられません。
ここに昭和三十九年六月二
十三日に当学園を訪問した際
にメモを取ったいくつかを紹
介します。―きれいな自然と
建物の長い、花々の咲きみだ
れた、山際の空に雲が浮かん
でいる。園長さんに子供たち
がぶら下がっている―

後日行われた校歌発表会の
記述ではこう書いておりまし
た。(十月十五日)―子供たち
が、よく歌ってくれた。気持
ちのよい学校だった。会が終
わって、子供たちみんなが手
をあげ、「さよなら」を言って
くれた。玄関で見送ってくれ
た子供たちもいる。子供たち
の学習発表も、よく覚えてく
れたものだと感心した―

父は生前から、「僕は詩人
なので、頼まれても作詞はし
ないよ」と言っていました。

しかし、思いがけなく毎日
新聞福島支局からの依頼で、
その趣旨である辺地校に校歌
を贈るうに賛同したのです。
かつて若い時代に教職につい
て、茂庭小学校に赴任したの

ですが勉学に勤しみたく半年
で辞めたことを悔やんでおり
ました。後年、めぐり巡って
茂庭小学校校歌を作ることに
なり、現地に再び訪れた際思
わず涙がこぼれたそうです。

そのような思いから携わつ
た校歌ですので、子供たちへ
の思いいれが人一倍強いので
しょう。大笹生学園校歌につ
いても、父のそのような思い
が歌詞の随所に感じさせられ
ます。学園の子供たちが、歌
詞にあるように、「元氣にお
はようのあいさつをかわし、
いつもにこにこなかよしとい
るよう」亡き父も願っている
ことでしょう。

大笹生学園の益々のご発展
を願ってやみません。



大笹生学園に寄せて



伊東 英直

創立六十五周年、心よりお
喜び申し上げます。校歌制定
からも五十年が過ぎたと知り、
時の流れの速さに驚いており
ます。

県内の小中学校に、校歌を
送るとい毎日新聞福島支局
様の運動に賛同し、作詞家の
高橋新二先生と共に、御学園
の校歌作りに携わりました。
高橋先生の楽しい詞に合わ



せ、メロディアスで明るい調
子、シンプルな構造での曲作
りに努めました。が、決して音
のとりやすい歌ではなく、生
徒さん達に喜んでもらえるだ
ろうかと、最初は少し心配し
ました。

御学園と十六沼の周りに、
当時まで広がっていた牧歌的
な風景。その中、行われた校
歌発表会で、生徒さん達が楽
しそうにリズムに身を委ねな
がら歌う姿を拝見し、とても
うれしく感じたものです。
この日の光あふれる印象の
まま、御学園の生徒さん達に、
今後希望と喜びが降りそそ
ぐことを心から願っております。



大笹生学園に寄せて



毎日新聞
福島支局長
坂巻 士朗

昭和38（1963）年1月1日の毎日新聞福島面のトップに、「新年に贈る」と題した社告が掲載された。「辺地の子らに校歌を 作詞作曲は権威四氏の手で」とある。それから5年間で延べ120校に上る小中学校と施設に「校歌」を贈った活動の幕開けだ。企画したのは、当時の吹山保忠支局長（故人）だった。社告は活動の目的を、こう紹介している。

〈児童、生徒たちが心すなおに正しく育っていくために、また教育の理想を高揚するためにも、学校に校歌がなくてはなりません。民謡が民族の叫びとすれば、校歌は生徒たちの心の叫びでもあります〉
時は高度経済成長真っただ中だ。だというのに、都会から離れた「辺地校」に指定された県内の小学校114、中

学校66の合わせて180校の大部分に校歌がなかった。〈都会地の学校なら、強いPTAの協力もあって、一曲二十万円もする校歌を作ることでもできますが、辺地ではまず望みません〉
スピードを上げて進む社会の中で、遅れがちな地域の子どもたちのために一肌脱ごう。そんな呼びかけに無償で応じたのが、作詞、作曲に当たった4人の音楽家たちだった。

「大笹生学園のうた」を含め全校の作詞を手掛けた詩人、高橋新二さん（故人）は家族に活動の様子を語り、取材ノートを残した。長男で詩人でもある、元小学校長の重義さん（72）が教えてくれた。

「父は詩人であるとの矜持が強かった。だから、作詞はしないと決めていました。でも、子どもたちを元気にしたいとの（吹山）支局長の思いに感じ入り、依頼に応えることになったのです」

作曲家の1人で、「大笹生学園のうた」に曲をつけた伊東英直さん（83）は「私は現代音楽をやっていたから校歌はちょっと、と最初は思ったんですが、高橋（新二）先生に『新しい息吹の音楽がいいんです』と説得されまして」と語る。

支局長や記者とともに、音楽家たちは、「校歌を作ってほしい」と依頼のあった学校を何度も取材に訪れた。「山の中でこぼこ道を長い間、車で走りました」と、伊東さんは懐かしそうに振り返る。実際に校舎や校庭を見て、子どもたちとふれ合って、詩が生まれ、曲が作られた。高橋さんは「校歌の贈呈式で子どもたちが元気に歌う様子に、父（新二さん）は『涙が止まらなかった』と話していました」と言う。

今日もどこかの学校で、子どもたちが誇らしげに声を合わせているだろう。

〈うれしいとき、悲しいときにもちよっと口ずさむ校歌、学校を中心に教師、生徒、親たちが一つの心で結び合うべき〉

半世紀前、子どもたちに素敵な贈り物をした郷土の人たちの思いは、今も生きている。

大笹生学園のうた誕生50周年記念発表会



卒園児紹介のコーナー

ここでは、大笹生学園を卒園した先輩たちの頑張っている姿を紹介します。



須釜良太くん

1人目は、須釜くんです。須釜くんは学園を卒業後、グループホームで生活をしながら、福島市内にある「虹色の樹」というところで働いています。

○お仕事について

主として市内で段ボールや新聞紙を集めています。たまに野菜の皮をむいたりもしています。

体力を使いそうなので、大変そうですね。結構疲れます。雨の日に段ボールを回収しに行った時なんか、重くて汗をかきます。

「だいぶ日焼けしましたね。夏は大変で焼けましたね(笑)」

「お仕事をはじめて半年になりましたが、仕事には慣れましたか?」

「最初の頃は、運ぶ先を間違えたりすることもありました。だいぶ失敗もなくなりました。たぶん慣れました(笑)」

「やりがいってどこですか?」
「日によってはお運び量が多いときがあったとき、がんばって全部やったときは「がんばったな」と思っています!」

○生活について

「お休みの日などは、どうやって過ごしていますか?」

「テレビを見ることが多いです。アニメが好きで、ビデオも見たりします。」

「お給料で買ったたり?」

「お給料はあまり使っていないですね。たまに仕事帰りにジュースを買ったりするくらい?」

「グループホームの生活はどうですか?」

「問題なく楽しく過ごしています。あ、たまに隣の人のいびきが気になります(笑)」

「大笹生学園と比べて、違う点がありますか?」

「うーん、よく分からないですが、ご飯はどっちもおいしいですよ!」

「家に帰るんですか?」
「毎週帰っています。金曜に仕事終わりに電車とバスで帰ります。」

「家の人とはよく連絡をとるんですか?」
「毎日電話してですよ!」

「毎日ですか?」

「園の散歩が楽しかったですね。園の散歩が気持ちよかったです。園に対して、何かここをこうしたい方がいい、ということはありませんか?」

「ご飯がおかわり自由だったらうれしかったです。あと、買い物訓練は月に2回ぐらいやりたかったです。」

「大笹生学園の後輩たちに向けて、何かメッセージをお願いします。みんな仲良く生活して下さい。あと、学校の勉強も頑張りますよ!」

「ありがとうございます。」

その後、須釜くんのお仕事の様子も見学させていただきました。今日は野菜の皮むきを一生懸命頑張っていました。

インタビュー中は笑顔がすてきな須釜くんでしたが、仕事中心のまじめな須釜くんもかっこいいと思います。とっても疲れやすい大変な仕事ですが、お仕事頑張ってください!



大内拓也くん

2人目は、大内くんです。大内くんは卒園後、川俣町にある「セルブからえで」というところで働いています。

○お仕事について

「どんなお仕事をしていますか?」

「お菓子の箱とかを作る、箱折りをしています!」

「手先が器用なんですね。そうですね。けど最初の頃はかき手順を覚えるまで大変でした。」

「他に大変なことはありますか?」

「箱の積み方が細かくて、今も間違えそうになります。間違えないように、確認しながらやっています。」

「やりがいはどこですか?」

「時期によってはおお客様の箱を作ります。それをやり終えるときが爽やかですね。」

「生活について」
「お休みの日などは、どうやって過ごしていますか?」
「テレビとかゲームが好きで、仕事から帰ると良くやっています。けど、たまに夜更かししちゃうことがあります(笑)」

「園での生活で楽しかったことは何ですか?」

「みんなで散歩したり、中庭や体育館で遊んだことが楽しかったです。最近はおんまりやらないから、懐かしく思います。」

「お家の人と散歩とかは?」
「出かけることはあっても、車で移動するのとおんまり歩かないですね。学園を出てから少し太っちゃいました(笑)」

「大笹生学園の後輩たちに向けて、何かメッセージをお願いします。」

「うーん、頑張ってください。あと運動しましょう(笑)。ありがとうございます。」

その後、お仕事の様子も見学させていただきました。お話中はとっても笑顔があふれていました。が、仕事が始まると真剣な表情で箱作りに取り組んでいました。頑張っている姿は、とてもうれしくてカッコイイ! これからも、お仕事頑張ってください!





豆まき(2月)
鬼はそと 福はうち!



卒業生を祝う会(3月)
たくさんの思い出ができたね



入園式(4月)
お友達が増えたよ!



春のレクリエーション(4月)
みんながんばれー!



市長訪問(5月)
プレゼントをいただきました



球技大会(6月)
ボーリングをやったよ!



劇団あそんぺ公演(7月)
らくご人形劇「たのきゅう」



芋煮会(9月)
みんなで食べるとおいしいね!



秋のレクリエーション(9月)
フレー!フレー!みんなで応援したね!



クリスマス会(12月)
サンタさんがきてくれたよ!

◆**あとがき**

少しずつ肌寒さが増し、学園の深まりが感じられる季節に なってきました。

今回のまないた山は、学園創立六十五周年とともに、学園歌及び学園旗の誕生から五十年前の記念するものです。五十年前の大笹生学園の姿を想像してみ ることは難しいですが、その頃 から現在と同じ学園歌が歌われ、学園旗が掲げられていたこ とを考えると、感慨深いものがあります。

また、半世紀もの時を経て、学園は大きく様変わりしました。一昨年には新しい園舎が完成し、時代の流れとともに増築を積み重ねた旧園舎から、個室を基本として家庭的な環境を備えた新園舎へと生活の場が移りました。その後二年経ち、児童や職員も新しい園舎による慣れきたるところです。グラウンドや駐車場も完成が近づき、これはいよいよ新園舎全体

◆**あとがき**

が完成となります。

移りゆく時代の中で、大笹生学園が担う役割も少しずつ変化してきています。職員一丸となつて、児童一人ひとりに合わせたより一層充実した支援と、地域生活を支えていく社会資源としての施設を目指して参りますので、保護者の皆様、関係機関の皆様には、今後とも協力とご支援を賜りますよう、よろしくお願ひします。

最後に、今回、記念誌『まないた山』の発刊に際しまして、寄稿をしていただいた方々、学園歌CDの作成に携わっていただいた方々を始め、ご協力いただいた関係者の皆様に、編集者一同より厚くお礼申し上げます。

編集委員会

- 鈴木 高橋 佐藤 酒井 尾藤 松田
- 貴 洋 真 奈美 英人 洋介 武久

